
次元の平和を守ります!!

御剣 貴京

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

次元の平和を守ります！！

【Zコード】

Z6839X

【作者名】

御剣 貴京

【あらすじ】

「魔王討伐？」「そ、魔王討伐」全次元最強に名を連ねる男が任されたのはとある世界の魔王討伐。母性溢れる同僚騎士に、オドオドしてるけど最強の魔法使い、ツンデレならぬツンドラな完璧従者を連れて、騎士であり魔法使いでもある男が異世界を行く！！ 最強、ハーレム、厨二要素を多分に含みます。それらに嫌悪のある方は注意してください。なお、残酷描写は念のため付けてあります。

プロローグ『Q・魔王討伐? A・そ、魔王討伐』

『世界樹の元に集いし者達』 通称『世界樹』。

全ての神々の王『神王』が、『全次元世界の統治と平和』を掲げて設立した組織。次元世界を股に掛けて活動する組織としては非常に小さいが、1000万人規模の会員を要し、その力は全次元最強とまで謳われる。

これは、『世界樹』に所属する1人の男の物語

「魔王討伐?」

「そ、魔王討伐」

広々とした室内に、二つの音が広がる。

一目見れば分かるほど高価な調度品の数々が、最も美しく見えるよう計算され配置された部屋。世界樹の元に集いし者達、会長室。その中央、巨大な机を挟むように配置された2つのソファー。他の調度品と同じく、一目見れば価値が分かるほど豪奢なそれに、言葉を紡いだ人物達は向かい合つように座っていた。

『魔王討伐』という単語を聞き、微かに嫌そうな顔をして首を傾げたのは黒髪黒目の中年 世界樹の元に集いし者達会員にして、

世界樹が誇る最強の騎士団『アルカディア聖騎士団』最高位 聖騎士王^{オーバー}の位を持つ“人間”『御神貴京』。

嫌そうな顔をする貴京を見てクスクス笑いながら、駄目押しとばかりに『魔王討伐』という言葉を繰り返す銀髪紅眼の美女世界樹の元に集いし者達創設者にして、その会長を務める“神王”『シリルヴィア・クラツツベルン』。

2人は今、世界樹で最も主となる活動『次元世界の平和を守るためにの任務』について話をしていた。

「IJの世界 ユースティアに生まれ出でた魔王を討伐してほしいの」

そう言つてシリルヴィアは、自分と貴京の間にある机の上、ホログラムにより投影された青と緑の2色で構成された惑星を指差す。

「それは……俺を出すほどの任務なのか？」

対する貴京は、相変わらず嫌そうな顔を隠さうともせずに首を傾げた。彼自身面倒臭がり屋というのもあるが、何より彼の位階は『聖騎士王^{オーバー}』、世界樹内でも有数の実力者である。单一惑星の魔王討伐なんてのは本来、中堅以下の会員が請け負うべき任務であり、彼が請け負う程の任務では無い。言わば、子供同士の喧嘩を最高裁判所に持ち込む様なものなのだ。新入りの育成という意味でも、彼が渉るのは別段おかしなことでは無かつた。

しかし、そんな貴京に対しシリルヴィアはゆるゆると首を振る。

「それがね、貴方を出すほどの任務といつよりも、むしろ貴方を出すべき任務なのよ」

「なに？」

シルヴィアの言葉に、貴京の表情が嫌そうなモノから訝しげなモノへと変化する。全次元世界の平和を心より願うシルヴィアが、任務に関する話で「冗談を言つ筈が無い事は貴京も良く理解しているつもりだ。

「これを見てちょうだい」

そう言って差し出されたのは数枚の書類。そこに書かれていたのは、今回の討伐対象である魔王のステータスを数値化したものだった。

「どれどれ？……」これは、マジか

ザツと流し見る事約十秒、書類から顔を上げた貴京の表情には、先程までの嫌そうな感じも訝しげな感じも残つておらず、純粋な驚きが現れていた。

「総合的に見て　上の下ってところか」

数値からおおよその強さを予測しそう呟く貴京。

世界樹内で上の下というのは即ち、全次元世界で見てもかなり上位の実力者、それこそ1万人いるかどうかというレベルに達していることを示す。

「少なく見積もつても中の上。どう見てもただの魔王クラスが持つていい力じゃないのよねえ」

「ああ、これは強過ぎる」

通常の魔王だと、その力は世界樹内で言えば下の下、奥へ下の中レベルである。これが单一惑星の魔王では無く、次元世界を丸ごと支配するレベルの魔王帝や次元魔王になれば色々変わつてくるのだが、それは別の話。

「魔王帝や次元魔王と比べても遜色無いこの強さ。次元世界の平和と均衡を乱す可能性は大いにあるな」

「ええ、それに加えて、諜報部の調査によると相当な野心家らしいから……」

「」いや、討伐する必要性あり、か

「やつてくれる?」

「……はあ、しようがないだろ?」

あくまで渋々と言つた様子ながら、貴京は溜息を吐いて頷いた。

「あつがとう……」

「他ならぬお前の頼み、任務じゃなくてもやり遂げてみせるわ」

「」ついして”神々の王”をお前呼ばわりする”人間”『御神貴京』は、魔王討伐という任務を請け負う事になつたのだった。

プロローグ『Q・魔王討伐? A・そ、魔王討伐』（後書き）

少しでも皆様に楽しんでいただければ嬉しいです。

これから宜しくお願いします!!

第1話『Q・後輩？A・いや、上司ですか』

『貴方一人でも余裕だらうけれど、無理を言つたお詫びとして同行者を2人つけてあげるわ』

任務承諾書に流麗な文字でサインして行く貴京に、シルヴィアは唐突にそう言い放つた。

サインと任務内容の確認に気を取られていた貴京は、それに適当に頷く。最低限の内容は聞いていたし、同行者をつけてくれるのなら断る理由は無いと思つたのだが

「マジか……」

僅か1分後、現れた同行者を見て貴京は思わず万年筆を取り落す。

「今日から宜しくお願ひしますね、貴京さん」

「（）ご迷惑にならないよう気を付けます」

部屋に入るなり早速挨拶して来た同行者2名は、1人は同僚で、1人はまさかの上司だった。

最初に挨拶し、貴京の事を『貴京さん』と呼んだのは20代前半の美女。腰まで伸びた流麗な黒髪に、透き通るような漆黒の瞳が印象的な女性だ。しかし、上衣の一部分をはち切れんばかりに押し上げる母性の塊こそ、何より目を惹くだろう。

優しげな雰囲気を全身に纏つた彼女の名は『神宮寺桜』。貴京と同じ『アルカディア聖騎士団』に所属する騎士であり、『聖騎士王オーバード』の位を持つ”人間”。入会時期としては貴京の後輩だが、位階とし

ては同僚にあたる女性だ。

そしてもう1人、オドオドした感じで挨拶したのは10代後半の美少女。背の中ほどで切り揃えられた柔らかく纖細な茶髪に、気弱そうな光を灯す薄茶色の瞳、そして見るからに華奢な体躯。

守つてあげたくなるような、小動物的な雰囲気を纏う彼女の名は『シエル・オーヴィアーロード』。世界樹最強の魔導師集団『聖アヴァロン魔導師団』の団長トップにして、最高位『オーバー・エンペラー』の位を持ち、極めつけは初代にして永世なる天界の長『天帝』でもある“天人”。容姿も雰囲気も後輩っぽさ満載だが、間違いなく貴京の上司であり、生きた歳月もこの場ではシルヴィアの次に長い。

2人共今回の任務難易度に全く見合わない規格外の実力者。貴京が思わず万年筆を落とすのもそこまでおかしなことでは無い。

「いやしかし、本当に冗談とかじゃなく、本気でこの3人で任務に臨むのか？」

と、落としてしまった万年筆を拾いつつシルヴィアに問いかける貴京。やけに真意を探るその様子からも、ありありとした困惑が伝わってくる。

「流石の私も、冗談でこの面子を呼び出すほどバカじゃないわよ」

対するシルヴィアは、そう言ってクスクスと笑った。貴京はそれを見つつ心中で、こんな任務で集めた時点で既にバカだと毒づく。

「バカで悪かつたわね」

思いつ切りばれている、笑顔がこわい。

「心を読むなよ」

「顔に出てたわよ」

グイツと迫つて来るシルヴィアに、貴京は悪かつた悪かつたと言つて頭を下げつつ、改めて部屋に集まつた人々を見回し一言。

「うん、何度も戦力過多だ」

自分含め世界樹が誇る最強クラス2人（自分と桜）に、名実ともに最強と呼んで差し支えない者が1人（シエル）。甘く見積もつても上の下クラスの魔王には、どこからどう見ても過ぎた戦力である。

「いや、何も理由なくこれだけの戦力を集めた訳じゃないのよ？」

「あん？」

と、流石に貴京の視線と言葉が痛くなつてきたのか、微かな苦笑いを浮かべながらシルヴィアは説明を始めた。

「ぶっちゃけちゃうと、貴方含め最強クラスの存在を出す必要がある任務つて全然ないのよね。貴方も今回の任務、100年ぶり位でしょ？」

「まあ、そうだな……」

正確には103年2カ月13日ぶりだなーと、規格外な記憶力を發揮し無駄に記憶を掘り返しまくる貴京。その日の朝食が忙しくもないのにコーヒー一杯だけだったことまで思い出した。驚愕のひも

じさと無駄を加減。

「貴方達も世界樹に所属してる以上、任務を全く与えない訳にはいかないのよね。下の者に示しが付かないっていう感じかしら。任務が無くても身分にあつた給料を与えてるから、尚更ね」

「ふむ……」

全次元の平和と統治を目的とした組織である世界樹だが、基本的に任務中に必要な金銭は自腹なため、しっかりと賃金が支払われている。ちなみに月給制であり、貴京クラスになると僅か1ヶ月で一生遊んで暮らせる額が手に入るから驚きだ。

まあ、それらは全て最高級の魔草や靈草、宝玉などの素材に消えている訳だが。

「……」まで言えば、私が何を言いたいのか分かるでしょ？」

「つまりは、任務を与えない訳にはいかないから、手近で一番難易度が高そうなこの任務に俺達3人を無理矢理宛がつたと」

「まあ、そういうことね」

相変わらず気まずそうな笑みのシルヴィアを数秒見つめ続けた貴京だったが、唐突に溜息を吐いて立ち上がる。

「はあ、分かったよ。俺らでちやつちやと魔王を倒してくれればいいんだろ?」

「… ありがとう貴京…」

「いえいえ、お任せ下さい。会長」

何千年生きようと女性には勝てないなあと、こんなところでしみじみ感じる貴京だった。

「えと、任務に参加するのは私達3人、で良いんでしょうか」

任務関係の書類提出も終わり会長室を後にした貴京、桜、シエルの3人は、いよいよ任務地のユースティアに向かうため、持ち物や人員の最終確認を行つていた。

「いや、4人だな」

「「え?」」

そこでシエルが発した任務參加人員の確認を訂正する貴京に、桜とシエルの2人が思わずハモる。

「任務に参加するのは4人だ。俺ら3人 + 1人、俺の従者が一緒に来るはずだ」

貴京のその言葉に、一瞬考える素振りを見せた桜がポンと手を打つて笑みを浮かべる。

「従者つていつと、アリシアちゃんの」とかじりあへ。」

「ああ」

「えと、じゃあ、今から呼びに行くんですか？」

「いや、そんなことしなくてもあにつけ来るわ」

「「え？」」

本日2度目のハモリにて、貴京が微かな笑みを浮かべると同時に

「お呼びですか？主様」

月光の様に煌めく銀髪を靡かせ、完璧と謳われる従者は姿を現した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6839x/>

次元の平和を守ります!!

2012年1月5日21時51分発行